

私は地獄へ行ってきた

中国東北部、旧日本軍占領地区の生存勞工の記憶

走过地獄

◎高嵩峰 李秉剛 編著
◎張玉彬 訳

遼寧大學出版社

私は地獄へ行ってきた

——中国東北部、旧日本軍占領地区の生存勞工の記憶

高嵩峰 李秉剛 編著

張玉彬 訳

遼寧大学出版社

圖書在版編目 (CIP) 數據

走過地獄：日文/高嵩峰，李秉剛編著；張玉彬譯。
沈陽：遼寧大學出版社，2009.9
ISBN 978-7-5610-5905-0

I. 走… II. ①高…②李…③張… III. 日本—侵華—史料—日文 IV. K265.306

中國版本圖書館 CIP 數據核字 (2009) 第 164708 號

私は地獄へ行ってきた

——中国東北部、旧日本軍占領地区の生存勞工の記憶

責任編輯：黃 鈴 張詩雋
責任校對：群 笑

封面設計：鄒本忠
徐澄玥

遼 寧 大 學 出 版 社

地址：沈陽市皇姑區崇山中路 66 號 郵政編碼：110036

聯繫電話：024—86864613 網址：<http://press.lnu.edu.cn>

電子郵件：lnupress@vip.163.com

撫順光輝彩色廣告印刷有限公司印刷 遼寧大學出版社發行

幅面尺寸：148mm×210mm

印張：9

字數：250 千字

2009 年 9 月第 1 版

2009 年 9 月第 1 次印刷

書號：ISBN 978-7-5610-5905-0

定價：40.00 元
500 円

前書き

平和と安寧のため、その苦い歴史を忘れないために

本書は「日本が中国の東北地区で中国の労工を奴隷のように駆使した事実を調査するプロジェクト」を行なった時に、労工の生存者が述べた資料を選んで整理して、日本語に翻訳したものである。書名は「私は地獄へ行ってきた」としたが、これは生存者の記憶をまとめてそう決めたのである。

「地獄へ行ってきた」ということは大変重い言い方である。本当に地獄へ行ったのか？読者の皆さんはこの小冊子の中の生存者が経験したことを読んで、私達と同じ結論が出るだろう。事例をいくつか見てみよう。

尚宝徳さんは1942年4月26日に本溪湖炭鉱ガス大爆発の生存者である。爆発の日に彼とほかの四人は柳塘坑道の中の100メートルのところで作業をしていた。大爆発が起こった瞬間、彼はほかの労工と一緒に巨大な気流に坑道の外へ飛ばされた。よみがえった尚宝徳は自分が坑道の入り口から100メートルの所にいた。体には妙に針金が巻かれていた。「目が覚めたとき、年寄りの人が私の傍にいた。「お前は誰だ。どうしてここにいるのかい。」と言いながら、私の腰に巻いた電線をとった。私は立ち上がって、腰、足、顔と耳だけにちょっと傷があった。後で推測して分かったのだが、多分気流が私を坑道の外の電線の上に押し出して、幸い割りにやわらかい地面に落ちた。私は目が覚めたとき、頭がぼうっとした。しかし振り返って炭鉱を見たら、黒い煙と火が炭鉱の中からどんどん出て、高く上がっている。」「私と一緒に作業をしていた労工は爆発の気流に遠くへ押されて死んだ。馬さんは坑道の入り口の巻揚機のセメント柱にぶっつけられて死んだ。

肖さんは入り口の外のレールに落ちて死んだ。張さんと丁さんは入り口から50メートルのところに落ちて死んだ。」しかし、大爆発後、日本炭鉱当局が立てた「本溪湖石炭鉄鉱公司産業戦士殉職碑」の碑文には「作業の時、1327名産業戦士が壮烈に殉職した」^①と書いた。今も、碑文が依然として文字がはっきりとし、「記念碑」も当時死んだ勞工の遺骨の坂に立っている。同じ炭鉱、同じ作業現場で作業をした勞工の生存者として、尚寶徳は地獄へ行ってきたと言えるのではないか。

今、瀋陽市に住んでいる生存者の王樹熙さんは1927年出生。1944年4月12日に瀋陽駅近くで勞工に連行され、旅館に閉じ込められた。数日後、連行された300人あまりが一緒に有蓋列車に乗せられて、黒河の山神府の近くの大城へ送られて、そこで軍用飛行場を造った。「冬の服はすぐに破れた。興安嶺の冬は零下30度、40度もあった。破れた服はぜんぜん寒さを凌げない。勞工たちは仕様がなく、体にセメント袋を被った。寒い風の中、道を歩く時、後ろに向いて歩いた。正面から風に向かうことはできない。夏になると、勞工たちはズボンをはいたが、背中が裸になった、全身裸の人もいた。30キロ内には住民がいなかった。私たちは、毎日ちょっと明るくなって朝ご飯を食べた。それから飛行場を造る作業を始めた。まず石を砕いた。それから地面を平らにしたり、木の根を掘り出したりした。地面を平らにしてからセメントを混ぜてそれを地面に広げた。この作業は機械がなく、全部手作業で完成した。作業をしたとき、かけ小屋によって作業量を分けた。作業を終えないと殴られる。重い労役と非人間的な生活で多くの勞工が病気になって死んだ。一年あまり経って、1945年8月日本が降参した時、連行された300人

① 日本戦犯の武部六蔵、古海忠之及び偽満州国戦犯の于静遠の供述によると、死者は1800人余りいた。原文は中国中央档案馆：《日本侵華戦犯筆供》の第5巻、265、353ページ参照。中央档案馆日偽戦犯档案 119-2-1152.1.5。

が、29人しか残らなかった。日本が降参しなければ、この29人は生き残ることができなかつただろう。これは地獄へ行ってきたと同じだろう。

このような例はいくらでも挙げられる。勞工の谷振斌、周茂勝が連行されて軍事工事を造りに行かせた。そこで6、7年も作業をさせられて、1945年8月になって日本人が降参してからやっと家に戻ることができた。一緒に連行された勞工の大部分は死んだ。虎林要塞を造った曹樹徳などの勞工は工事が終わって日本軍がご飯の中に毒薬を入れて毒殺された。下痢をした曹樹徳はご飯を食べなかつたので、幸い逃げ出した。阜新の炭鉱に騙されて連れて行かれた張懷善、撫順の老虎台に連行された董建徳は病気で「死体倉庫」入れられた経験があつた。友達の救助で命を拾った。違う所から連行された勞工は、それぞれ違う所で作業をさせられたが勞工の運命はほとんど同じだ。これが当時、日本人に奴隷として駆使された中国勞工の惨めな境遇だ。



鞍山製鉄所の人を騙した募集広告

この資料を読んだ方々がこれらのことに疑問を持っている

かもしれない。勞工の生存者の話は本当なのか？当時中国の東北部にいた日本人や日本兵は本当にそんなに残虐だったのか？このような疑問を持つ方は、人間の善良な本性によってそう思っても納得できるのだ。そうだ、侵略者も人間なのだ。彼らはもともと侵略された国の不幸な民衆にそんな残虐なことをしないはずだ。しかし、当時、日本軍国主義の教育を受けた侵略者の行為は、既に普通の人間の行為ではなく、既に中国人が言った「鬼子」になって、彼らの行為は悪魔の行為になったのだ。彼らは既に日本軍国主義の侵略機械の一部になったのだ。「大東亜共栄圏」の夢を適えるために、いろいろな手段を使って、数え切れない中国の勞工を集め、むやみに中国の森林木材と石炭資源を略奪し、軍事工事を造った。中国人を人間として扱わなかった。中華民族を劣等な民族として、中国人を、言葉ができる道具、畜生とみなした。中国人を虐待したり、殺したりするのは鶏を殺すのと同じで、罪惡などとは思わなかった。思想が改造されて、再び人間になった日本軍の戦犯、土屋芳雄が言ったように「戦争は人間を鬼にしたが、中国人は戦犯を改造し、「鬼子」の人間性を戻し、鬼を人間に変身された」^①のだ。

私たちは生存している勞工の話した資料を集めた。同じ所で作業をしたほかの生存者の話はそれを証明するだけではなく、日本軍関東軍憲兵隊の歴史の資料もそれを証明している。例えば、捕虜になった武心田は昔のことを思い出したときに下記の話しを言った。「1943年6月下旬、私を含めた1300名の捕虜の勞工は関内から東北の黒河に連行され、国防道路を造った。ご飯をお腹いっぱい食べられなかった。それに、作業も大変疲れた。飢餓、寒冷、病気になっても治してくれなかった。そして日本兵の虐待を受け、多くの勞工が死んだ。一日に20人あまりが死んだ時もあった。私たちが

① 日本軍齊齊哈爾憲兵隊特務課長土屋方雄と劉丹華著の《人間と鬼の角逐》。遼寧教育出版社、1995年。

黒河を離れた6月下旬から、9月下旬までの三ヶ月間だけでも、1300人あまりの勞工は500人あまりしか残らなかった。一緒にいた800名あまりの友が黒河で死んだのだ。」それから武心田と生き残った勞工500人あまりが鞍山の昭和製鉄所の弓長嶺鉄鉱へ連行され、続けて苦役をされたのだ。

生存者武心田の話は日本軍関東憲兵隊の資料がそれを証明している。

日本関東軍憲兵司令部の命令によると、1943年6月に関東軍第44部隊が6月28日に山海関で華北軍から1500名補導工人^①を受けて第3619部隊に渡した。そして直接、汽車で黒河省の神武屯の近くの双橋駅まで乗せ、近くの軍用道路を造った^②。同じ年の10月にこの補導工人は777人だけが生き残った。その中の600人は3619部隊が鞍山昭和製鉄所に連行し、後の177名の中の59名が死んだ。残った118名は汽車でハルビンに連行した^③。

上記の二つの資料を見ると、武心田の話した人数は日本軍の資料に記載された人数と食い違いがあるが、時間、場所、作業内容などはほとんど同じだ。武心田はただの一人の捕虜で、勞工の確かな人数を把握するのは不可能だ。日本関東軍の資料の記述は勞工の述べたことの真実さを証明している。

上記の資料から、ただ三ヶ月間の作業で、これらの勞工は半分以上が死んだことは、当時日本軍が中国勞工を残酷に駆使したことを説明した。

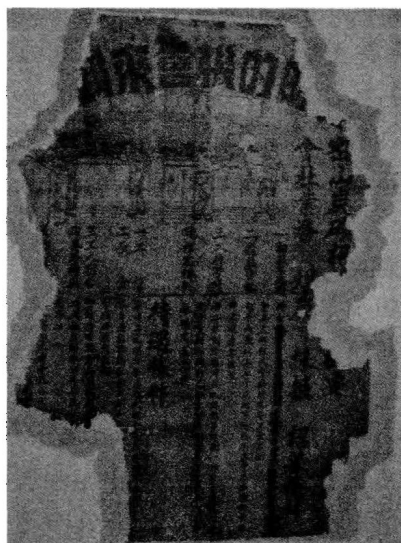
読者の皆さんにこの歴史をもっと多く分かっていただくために、当時の関係資料を選んで、付録として本書の最後の一

① 日本軍は、捕まえた捕虜と百姓からなった勞工を「特殊工人」と呼んだ。後は捕虜を「補導工人」、百姓を「保護工人」と呼んだ。

② 関作命第189号、《関東軍命令》(極秘)、1943年6月25日、吉林省档案館保存。

③ 孫憲高第502号、《特殊工人移管状況に関する件》、1943年11月9日、吉林省档案館保存。

部分とした。



密山炭鉱の人を騙した募集広告

資料が記載している事実は見るだけで心を痛ましめるのだ。例えば、西安炭鉱で死んだ勞工、牛世清の持ち物から見つけた最後の一ヶ月の「勞工票」即ち給与票の中の数字は、牛世清は西安炭鉱の勞工で、そこで一年で死んだ。しかし、彼は報酬をもらっていなかったばかりか、炭坑の4.24元の債務があった。また、「日満商事株式会社調査室」の「秘密」の文字を入れた『満州炭坑資材読本別冊』の中には、勞工の死亡を「資材」の消耗と計算した。その中の記載によると、1943年中国東北部で各種炭山の勞工の死亡率は案外多かった。勞工が炭山に来て初めの半月の死亡率は6.7%、6ヵ月の時の死亡率は75.9%もあった。西安炭坑では一年近くの間に、新しく増えた勞工はほとんど「消耗」した^①。これらの資料は別の面から勞工の生存者が述べた資料の

① 日満商事調査統計の月報第八卷、第九、十号、《満州炭鉱資材読本別冊》（極秘）、第23ページ；遼寧省档案馆保存、日本語資料工鉱第2088号。

真実さと日本軍が中国勞工を駆使した残虐さを証明している。

戦争の歴史はすでに半世紀以上過ぎ去った。人類社会はもう新しい歴史に入っている。この時点でこの資料を出版するのは何の意義があるのだろうか。中国では古代から「歴史は鏡である」と言う言い方がある。歴史を鑑みてこそ、真実に将来に向かうことができるのだ。私達の世界がもっと平和と安定になるために、社会をもっと調和させるために、私達は歴史を忘れることができない。

2008年「九一八事変」記念日の前に、私達は日本の北海道から中国を訪問した民間団体を迎えた。彼らは「九一八事変」が起こってから北海道から出発して、中国の東北部に侵入した日本部隊の跡をたどって、この部隊は中国でいったい何をやったのかと調べに来た。残念なのは、私達がその歴史を十分研修しなかったもので、訪問者の希望には満足できなかった。日本侵略軍は当時中国の東北部でやったことだけを紹介した。座談会では、「当時の日本の新聞には日本軍は中国で匪賊を掃蕩し、輝かしい成果をあげ、行くところでは民衆に歓迎されていたと載っていた。日本軍隊は中国にいた時、中国の民衆は反抗したことがあるのか」と聞く訪問者がいた。訪問者がこの質問をすることを私達は十分理解する。同時に、彼らも完全に日本の宣伝を信じていないから、遥々中国の東北部に来て日本軍が、当時行なったことを調べに来たのだ。私達はこの日本の民間団体の行動に敬意の念を持っている。その反面、相当多くの日本人は日本軍が中国を侵略した時に犯した罪が分からなかった。だから、中国人はよく知っている事実を、日本の普通の民衆に紹介することが非常に必要であり、これも私達、歴史研究者の責任でもある。

これこそ本書を編集し、出版する目的である。正確に歴史を認識することは、中日両国人民が長期的に友好的な隣国関係を発展させる重要な基礎の一つである。中日両国人民の交流が増えるにしたがって、更に多くの日本国民が当時の日本帝国主義が中国を侵略した歴史を多く、深く理解した上、

中日両国人民が歴史問題への理解に更に多くの共通点を持つように促進し、歴史の悲劇を再び繰り返さないようにしたいと願う。

目 次

前書き 平和と安寧のため、その苦い歴史を忘れな

いために 1

一、関内で騙されて、連行された勞工 1

1. 張樹和：赤い掘っ建て小屋でのつらい歲月 1
2. 黄漢民：血まみれ、涙まみれの港 4
3. 尚宝徳：ガス大爆発の悪夢 9
4. 宋宝鈞：肉親探しのためにトラの口に入る 12
5. 高彦喜：鉄山脱出 17
6. 黄邦富：シェパード小屋から生き残り 22
7. 張懷善：死人の倉庫の話 26
8. 董建徳：悲慘な時代 29
9. 徐懷珍：納金口子の勞工の思い出 35
10. 邱振東：黒い土地を故郷に 41
11. 李世祿：家族全員が煙台での勞工の経歴 46

二、東北で連行された勞工 52

1. 温会喜：五回勞工に行った経歴 52
2. 王喜財：孫呉での勞工の経歴 56
3. 肖質雲：ある女性勞工のつらい経歴 60
4. 呉月慶：二回父の変わり勞工に出た経歴 62
5. 謝 寛：「優待された」西安炭鉱の勞工 67
6. 張樹海：烏奴尔での六ヶ月 71
7. 焦伝春：日本の兵器工場での経歴 75
8. 曹樹徳：私は地獄へ行ってきた 77
9. 李漢祚：奉天日本軍倉庫での勞工の経歴 80
10. 何徳礼：金州の龍王廟での「勤労奉仕」 86

三、東北で騙されて、連行された勞工	91
1. 李永庫：騙されて、連行されたので、逃亡	91
2. 範徳良：涙の大豊満	93
3. 金正芳：日本兵隊での勞工の経歴	96
4. 周茂勝：七年間の苦しい歲月	105
5. 谷永利：雪の夜中家に戻ってきた父親	107
6. 李志雲：一人小さい勞工の経歴	111
7. 王樹熙：300 人が29 人しか残らなかった	114
8. 劉再坤：「補導工」の苦難	119
四、「勤勞奉公」——強制に募集された青年勞工	123
1. 江樹宝：勞工に行く経歴と「勤勞奉公」	123
2. 姚醒民：孫呉「勤勞奉公」隊の暴動始末	127
3. 方徳財：阿尔山からの脱出	135
4. 周連碧：四回の「勤勞奉公」	140
5. 李景春：私の「勤勞奉公」の経歴	144
6. 于福順：私は「勤勞奉公」三回募集させられた	156
7. 任長徳：日本開拓団での「勤勞奉公」	161
8. 張同徳：昭和製鉄所での「勤勞奉公」	163
9. 左憲良：血の海になった「731」	167
五、「特殊工人」——東北へ連行された捕虜の勞工	181
1. ザイ文華：生と死の間	181
2. 孫連甲：三層の電気の有刺鉄線内の「特殊工人」	185
3. 武永和：東北での勞工の経歴	189
4. 武心田：草原で道路を造った時の生と死の経歴	196
5. 鞠修経：東寧から撫順へ	201
6. 李振軍 朱韜：新邱炭鉱の「特殊工人」の暴動	205
7. 張思問：東寧の「特殊工人」の暴動	218
六、別紙、資料	231
1. 五家子軍工事使用苦力ノ狀況ニ關スル件 報告/通牒（極秘）	231
2. 齊市當局ノ勞務者強制供出ニ伴フ反響ニ關 スル件（秘）	233

3. 軍直轄特殊工事苦力ノ轉用計画ニ關スル件 報告（至急 極秘）	237
4. 訥墨線現場作業調査報告	240
5. 炭鉦勞務者逃亡原因に就いての座談會	244
6. 牛世清ノ工票	251
7. 軍使用特殊工人党與日軍襲撃逃走ニ關 スル件（秘）	255
8. 關東軍命令（極秘）	262
9. 特殊工人移管狀況ニ關スル件（秘）〔二件〕	263
10. 鉦山勞務者採用後期間別死亡者加重比率表	267
あとがき	269

一、関内で騙されて、連行 された勞工

1. 赤い掘っ建て小屋でのつらい歲月

張樹和

張樹和さんは1924年生まれ。大連港務局から定年した幹部。現住所は遼寧省大連市七星街140号。訪問時間：2003年12月12日。



張樹和

私の故郷は河北省青島の崇仙鎮である。1938年の秋、私は15歳の年に、日本軍は私の故郷を占め、崇仙鎮で拠点設けた。当時、私の家族は七人で、暮らしに困っていた。私は長男だ。大連の港で働いた同郷人が家に帰って、勞工を募

集してきた。その人を信頼したので、私も街の二、三十人と一緒に故郷を後にして、大連に向かった。当時家族の暮らしのために、少しでもお金を稼いだかったのである。

大連に来て、港の赤い勞工の寮に住んだ。寮は三階建ての建物で、中は木で構造である。より多くの人住めるように、中は四階に作り直した。そして、一階には上の段と下の段から成っていて、一番下は地面に住んだ。上の段の人はちょっと頭を上げると、天井に突くのだ。寝るとき、みんなぎっしり詰めた。このような建物の中には人数が多いとき、千人も収納した。布団はみんな自分の家から持ってきたのだ。しかし、一年間も経たないのに、布団は麻袋や破れた蓆になった。というのは、稼いだお金は足りなくて、布団を売ったり、質屋に入れたりして、食べ物を買ったのだ。中には頭にうまく奪われて、売られた人もいた。そのとき、誰かの掘って小屋の布団が多かったら、その頭がまあまあいいなと思った。

初めの時は毎日トウモロコシの粉や高粱の米などなんとかいっぱい食べた。太平洋戦争が始まって、勞工の食べ物はどんと変わった。ほとんど毎日黴が出たトウモロコシの粉で作った窩窩頭だった。それでも中には団栗の粉も混じっていた。食堂の中でセメントで大きい池を作ってあった。その中で大根の漬物を作って、勞工たちが食べた。いわゆるおいしいものを食べたときにすこしだけ野菜をたべたのだ。野菜を作るとき、豚の餌を作るのとかわりがない。大根を細かく切って、大なべでお湯を沸かして、ちょっと塩を入れる。出来上がる時油をちょっと入れる。お腹いっぱい食べられないので、作業をするときに、こっそり砂糖を食べたり、大豆油をそのまま飲んだりした。

港では貨物列車から物を卸したり、船に物を積んだりした。機械がなく、すべて人がやった。大きい鉄板が十八、九人で運んだ。鉄道を運ぶのに十六、七人が要るのだ。倉庫から貨物列車まで2、30メートル、遠い場合4、50メートル

ルもあった。一日で一人が30トンの荷物を卸したこともあった。船積みするとき、船が高くて、数階の足場を作って上がっていくのだ。毎日12-3時間やり続け、夜遅くまでやるのはよくあった。私は子供だったのでいくら給料をくれるはずなのか分からなかった。数で給料をもらおうといったが、一ヶ月でせいぜい日本のお金で2-3円だけだった。

私は港での非人間的な取り扱いに堪らなくて、二年間足らずこっそり逃げた。沙河口の銅の鑄造工場で暫く働いて、故郷に帰った。1942年の秋、故郷では洪水が出て、生活に困っているところ、勞工を募集する同郷人がまた家に帰って、数十人を募集した。私は再び大連の赤い掘っ建て小屋に来た。相変わらず港で作業をした。一年間働いて、病気にかった。熱があつて力はなかった。とうとう知覚を失って病院に運ばれた。病院は医者も薬も足りなく、看病する人もいなかったのも、ひどい目にあった。何の病気だか分からなく、後でコレラと言われた。幸い病状が一番ひどかったときに仲のいい同郷人がうどんを数回買ってくれた。それを食べてちょっとよくなった。病院で半年もいた。半年でも死んでいなかったのも医者もびっくりして、怪しいと思った。頭に知らせして私を連れ戻した。退院しても力がなく、働けなかった。頭に給料をもらいたかったが、清算してみたら、半年入院して働かなかったのも、食事代を貸しているのだと言われた。このままでは生きていられないと思い、1944年の秋にこっそり逃げて、本溪の同郷人のところへ行った。日本が降参したまでに手伝いとして働いた。

赤い掘っ建て小屋で死んだ勞工は数え切れなかった。朝死んだ人がよく見かけた。一日で十人が死んだのも珍しくなかった。特に冬の季節である。病院のすぐそばで死体が重ね積み上げられたのをこの目で見たのだ。また作業の辛さに耐えられなくて、自殺した人もいた。私のそばに寝ていた30代の人がある日の夜、首を吊って自殺した。私の同郷人で彼の家は私の家から二三キロのところだった。名前がはっきり覚えて